

英語コーパス学会第13回大会

日時 1999年4月17日(土)

会場 四国大学 (徳島市応神町古川)

(JR 徳島駅で徳島バスに乗換え15分、四国大学前下車、徒歩3分。)

<http://www.shikoku-u.ac.jp> および同封の時刻表参照)

ワークショップ 10:30-12:30

《研究者のためのホームページ作成》 講師 同志社大学 西納
春雄 梗概

先着 30名 (予定)

参加費 会員無料・非会員1,000円 (申し込みは電子メール・郵便で事務局まで)

受付開始 12:30

開 会 13:00

1. 会長挨拶 □□ 大東文化大学 □□ 齊藤 俊雄
2. 四国大学学長挨拶
3. 1999年度総会
4. その他

研究発表 第1セッション 13:15-15:15

□ 司会 □ 名古屋大学 □ 杉浦 正利 □ 椋山女学園大学 □ 深谷 輝彦

1. 学習者コーパスで見る時制の誤り：動詞の *lexical aspect* による影響を考える 梗概

□□□□□□ 東京学芸大学大学院生 青木 恵

2. コーパスを用いた *Phrasal Verbs* の研究：go と take で始まる *Phrasal Verbs* の 梗概

タイプ別、意味別頻度数を中心として□□ 四国大学□□ 古田 八恵

〈休 憩 14:30-14:45〉

研究発表 第2セッション 14:45-15:45

□ 司会□ 大阪外国語大学 大津 智彦□ 関西学院大学□ 八木 克正

1. 学術論文と口頭発表における英語使用の比較：コーパス編纂と分析 梗概

□□□□□□ 帝塚山短期大学□ 梅咲 敦子

2. 「Go --- ing」構文とその周辺 梗概

□□□□□□ 関西外国語大学□ 岡田 啓

〈休 憩 15:45-16:00〉

特別講演 16:00-17:15

□ 司会 徳島大学 中村 純作

□ 「コーパスを利用した自然言語処理システムの開発」 梗概

□ 講師 徳島大学工学部知能情報工学科 青江 順一

閉会の辞 四国大学 古田 八恵

《懇親会 17:45-19:30 四国大学 30周年記念館 1階 会費 4,000円》

□□□□□□□□ 司会□ 徳島大学□□ 田中 廣明

英語コーパス学会 (Japan Association for English Corpus Studies)

会長 齊藤俊雄

事務局 770-8502 徳島市南常三島町 1-2 徳島大学総合科学部 中村純作研究室

TEL: 088-656-7129 E-mail: (E-mail address deleted)

郵便振替口座 00940-5-250586

URL [../index.html](#)

英語コーパス学会 □□□□ (Japan Association for English Corpus Studies)

会長 齋藤俊雄

事務局 770-8502 徳島市南常三島町 1 - 1 徳島大学総合科学部 中村純作研究室

TEL 0886-56-7129 郵便振替口座 00940-5-250586 (英語コーパス学会)

E-mail: (E-mail address deleted)

URL [../index.html](#)

◆大会当日、入会受付もいたしますので、お誘い合わせの上ご参加下さい

□

(年会費 一般 4,000 円 学生 3,000 円)。

□

また「当日会員」としての参加も受け付けております (1,000 円)。

英語コーパス学会第13回大会レジュメ

◆ ワークショップ《研究者のためのホームページ作成》

(講師 西納 春雄)

このワークショップでは、研究者のためのホームページの作成を手ほどきします。

World Wide Web (WWW)システムが発達して、豊富な学術情報が簡単に入手できるようになりました。これを利用して研究の役に立てておられる方々も多いことと思います。ですが、学術情報は取得一辺倒の一方的なものではありません。研究者は相互に情報を交換して、より高いレベルの研究へと切磋琢磨することが必要です。WWWホームページ上に研究情報、研究業績を公開することは、双方向的な情報交換のもっともすぐれた方法の一つです。

ホームページはまた、その中にリンクを整備することで、個々の研究者がインターネットを利用する際の情報アクセスの玄関口として利用できます。これを大学の、あるいは商用のサーバに置けば、研究室や自宅はもちろん、世界のどこからでもいつでもアクセスできる自分専用カスタマイズされたページがもてるわけです。

このワークショップでは、現在のパーソナルコンピュータで利用できる基本的なソフトウェアを用いて、1) 個人プロフィール、2) 研究業績公開、3) 関連学術リンクを作り込んだホームページの作成法を学びます。受講の前提は、WWWを利用できること、ワープロソフトが利用できることとします。

◆ 研究発表 第1セッション

● 学習者コーパスでみる時制の誤り：動詞の lexical

aspect による影響を考える

(青木 恵)

最近学習者コーパスを使った研究が注目を集めているが、本研究では日本人英語学習者コーパスを用いた第2言語習得理論の検証の一例として、時制の習得における動詞の lexical aspect の影響を調査してみたい。

<時制の誤りと lexical aspect>

Aoki(1997)では中学1年生から大学生までの自由英作文をコーパス化し、5つの文法事項の導入から定着までの時差を調べた。その結果5つの文法事項の中で一番導入の早い現在形がなかなか定着されず、現在形は学年が上がるにつれ他の時制との混同が多く見られることがわかった。この現在形の定着を遅らせている原因の一つとしては母語である日本語の影響の強さも考えられるが、本研究では別の切り口から時制の習得を困難にさせている要因を探る。

本研究が学習者に時制の習得を困難にしている原因として取り上げたものは lexical

aspects (動詞の意味特性)である。動詞の意味特性による時制や相の習得の違いは第1言語習得でも注目をされているが、L2においても Andersen (1991)によって Vendler (1967) の分類を応用した state, activities, accomplishments, achievements という4つのカテゴリーの動詞群によってその習得の困難度が変わってくると言われており、この数年で実証的な研究も増えてきている (Bardovi-Harlig & Reynolds 1995; Tono & Aoki 1998)。この理論を学習者コーパスを用いて検証することによって、時制の習得状況のより深い解明を試み、更には学習者コーパスと習得理論との結びつきの可能性を探ることが本研究の目的である。

<使用データ>

本研究では投野由紀夫氏(ランカスター大学博士課程)を中心に構築が進められている JEFFL Corpus (Japanese EFL Learner Corpus)を使用する。使用データは中学1年生から大学生までの各学年の自由英作文であり、全ての時制の誤りに各エラー・タグが付与されている。これを lexical aspect による動詞分類ごとに習得度を算出し、学年ごとにどのような習得度の変化があるかを調査する。

<結果と考察>

結果の詳細は当日報告する。JEFFL Corpus 構築にあたっての経過と今後の課題についても合わせて報告したい。

● コーパスを用いた Phrasal Verbs の研究： go と take

で始まる phrasal verbs のタイプ別、および意味別

頻度数を中心として

(古田八重)

近年、口語英語に対する関心の高まりとともに phrasal verb にも多くの関心が寄せられるようになり、様々なテキストが出版され、辞書にも別項目 (separate entry) として記述されるようになった。Phrasal verbs はかつてないほど速いペースで造り出され、多くのものは口語英語の片隅から主流 (mainstream) のことばとして定着するが、他方で古くなったファッションのように消えていくものも多い。

一般的にこの種の結合で最もよく使用される動詞は、"old, common, monosyllabic or trochaic 'basic English' variety"(Live, 1965) であると言われている。Martin(1991)は15世紀から20世紀にかけての英米の family letters を調査し、頻度順に go, come, put, bring, take, set, make, give, lay の9つの動詞が最もよく使用されるとしている。さらに、外国人学習者にとって phrasal verbs 学習の実際の困難点は syntax よりもむしろ一つのタイプが様々な意味を帯びる semantics の分野であると述べている。また、Cornell(1985)は Bywater を引用して、「native speakers of English と外国人学習者の英語の明らかな相違は前者の英語が phrasal verbs で満ちているのに対して、後者は phrasal verbs の使用を

注意深く避け、その結果、堅苦しい英語になっている(sound stilted)」と述べている。

本研究では、外国人英語学習者が困難と感じる phrasal verbs を習得するには、やはり最も一般的な、よく使用されるものからスタートすべきであると考え、Martin の挙げた動詞の中から go と take を選び、MCA & MCB, Brown Corpus, CSPA(the Corpus of Spoken, Professional American-English)の3種類のコーパスを用いてどのようなタイプの phrasal verb がどのような意味で最もよく使用されているかを調査した。本発表では、各コーパスに共通して頻繁に表れるものをタイプ別、意味別に提示し、また、英米での相違、書き言葉と話し言葉での相違点などにも言及したい。

◆研究発表 第2セッション

- 学術論文と口頭発表における英語使用の比較：コーパス編纂と分析
(梅咲 敦子)

書く際と話す際に用いられる英語には差があると考えられるが、書かれた論文と口頭発表の場合にはどのような差があるのか、またその差はどのような要因によって生じるのか。これらの疑問を解決するために、筆者は、物理系国際会議の口頭発表を録音し文字化したテキストと、その発表と同じ科学者が同じタイトルで会議のプロシーディングズに書いた論文を比較してきた。3年計画の最終年度として現在までに10対の書かれた論文と口頭発表をコンピュータ処理可能な状態にした。本発表では、これまでの224対の分析結果と考察をもとに、10対を多角的に分析し考察を深める。

まず、語彙・文法面から、口頭発表と論文に使用されている名詞化、受動態、後置修飾分詞、動名詞、分詞構文(分詞節の副詞用法)、不定詞、関係詞、副詞用法の従属接続詞、名詞用法のthat節、等位接続詞、共立詞の頻度をBiber(1988)の定義に基づいて数え、彼のLOB, London-Lund コーパスの各テキストカテゴリーごとの数値を用いて、口頭発表と論文、および各ペアの相関を出す。

語彙・文法上の相違の生じる要因はディスコース生成過程にあると考えられる。言語を使用する際には、まず語彙や構文を考えるのではなく、何を伝えたいか、そのためにはテキスト全体をどう構成するか、テキストのそれぞれの部分で何を伝えるか、そのためにどのような語彙・構文を使用するか順に考えるであろう。

その生成過程にそって、各ペアのディスコース構成を比較する。比較には、Swales(1990)の情報構成機能区分(moves)を用いて、どのような機能区分がどのような順序に配列されているかを調べる。さらに、口頭発表と論文で同じ情報機能を果たしている部分の英語を比較する。

ディスコース構成の相違と語彙・文法の相違を関係づけ、ディスコース形成モデルを提示し、口頭発表と論文における語彙・文法上の相違の生じる要因を説明する。

● 「Go --ing」構文とその周辺

(岡田 啓)

前回の発表で、「go --ing」を「come --ing」と比較することにより、「go --ing」は社会的慣行 (Social Institution) として確立した行為を表す一方で、「日常性からの離脱」を意味することを示した。それらはスポーツ・趣味 (go swimming/painting) 社交・遊興 (go drinking/visiting/courting) 旅行・休暇 (go traveling/holidaying) 狩り・採集 (go hunting/nutting) 探索 (go looking for something) 買い物 (go shopping) などである。そのうち come と組み合わせになるのは社交、探索など (come visiting/looking for something) に限られた (きわめて少数の例をのぞく)。

さらに「日常性からの離脱」は表さないが、興味深い go 特有の用法として習慣的活動・職業 (go sowing/clerking) などがあった。

Bolinger (1983) の指摘するように --ing は go のみでなく be away/be off/be out/go off fishing のように、副詞的小辞を含む句動詞など、さまざまな動詞と共に起る。また、go と結びつく --ing には次のように for や on またはその両方と結びついてほぼ同義的な用法を持つものもある：

- 1. □ go for/*on a swim
- 2. □ go on/for a walk/trip/holiday
- 3. □ go on/*for an errand

この発表の目的は、□ walking, for a walk, on a walk などが go 以外にどのような動詞と結びつくのか、コーパスから具体的に用例を提示・分類することである。そして時間が許せば、go walking, go for a walk, go on a walk の語法上の相違についても考察してみたい。

コーパスとしては、現代の小説・随筆などを収録した関西外大コーパス (160MB), Project Gutenberg, 私的コーパス (50MB) 英紙 The Daily Telegraph (2年分), The Guardian (1年分), 米紙 The Washington Times (3年分), Time Magazine (1989年～1994年), USA Today など、2GB 弱 (3億語以上) を用いた。検索ソフトは TXTANA (v. 1. 60) を用いた。

◆特別講演

● 「コーパスを利用した自然言語処理システムの開発研究」

(講師 青江 順一)

自然言語処理システムの開発においてコーパスの利用は必要不可欠であり、具体的には下記の研究開発に利用している。まず、日本語コーパスについては、WWW上の文書、新聞、特許、広辞苑辞書データなど収集し、日本語解析エンジンの開発と文書分類における分野別

